もに…」と思っていた。軍医の一人が「みんな覚悟は出来ているな」と大きな声で、怒鳴った。衛生兵も、看護婦も一斉に「はい！」と即答した。

私は、召集を受けて村を出発する際、見送って頂いた皆さんの前で「体の続く限り、命のある限りお国のために頑張って来ます」と約束した日がきたのだと、ふとその日のことを思い出していた。

患者収容は夜が明けるまで続き、病室は一夜にして一変した。

前日までは海軍軍人の患者さんで、比較的静かで、規律正しい内科病棟が、老若男女の区別なく一般市民の患者さんで埋まり「痛い、痛い、看護婦さん」と四方からうめき声が響きわたる。

二、三日すると、傷口に蛆虫（うじむし）がわき初めた。耳の中などいたるところでウヨウヨと動き回る。それまで、生きている人に蛆虫がわくなんて考えなかった。

「虫がかむ、痛い、痛い」と苦しむ声に、電灯を片手にピンセットで蛆虫を一匹残らず取っても、翌日にはまたウヨウヨと出てくる。いったん病室に入ると、なかなか控室には戻れない状態だった。

とてもかわいい女の子（小学校三年生）がガラスの破片で右ほおを大きくえぐり取られていた。体中にも破片が突き刺さっていた。お父さんは、師範学校の教員をしており、生徒とともに大村の学校へ疎開していて無事だった。

お母さんは、原爆が投下される二日前に出産し、市内の防空壕に入っていたという。娘の重体を知り、お母さんは自分の体が充分でないのに、その当時はなかなか手に入らなかった卵、きっと何キロも歩き回って買ってきたのだろう。その卵を手にして来院。

変わり果てた娘を抱え込むようにして「元気に出ていったのに…」と言って、ただ涙を流すばかり。数時間後、女の子は父母にみとられ、帰らぬ人となった。何一つこの子たちが悪いことをしたわけでもないのに、前途有望であった娘さん、わずか十年にも足りない短い人生、あまりにも可愛想で、ともに涙し天国への旅立ちを見送ったのでした。

悲惨で、恐ろしい戦争を二度と繰り返さないよう、世界中に永遠に平和が続くことを念願し、戦争で亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りし、筆を止める。